
ムーンドリップ～月の雫～

ガッツマスク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムーンドリップ〜月の雫〜

【Nコード】

N3223F

【作者名】

ガッツマスク

【あらすじ】

戦争によって一度は全滅しかけた世界を舞台に一人の少年の成長を描く物語

プロローグ

これは何億年先の地球を舞台にした物語

かつて人々は森を切り開き道路をつくり定住していた。

自動車と呼ばれるものが昼夜を問わず走り回っていた。

そんなとき、ある国で内戦が起きた。

始め他の国々の人々は感心を示さなかった。誰かがなんとかしてくれる。私には関係無い。

そんな態度に腹を立てたのは、内戦の起きている国の民だった。

やがてそれは国々の間の戦いとなり、人種間の争いえと進んでいった。泥沼となったそんな戦いを終わらせるべく、ある国の軍人は押してはいけないスイッチを押してしまった。

核のスイッチである。その一つのスイッチによって、何千、何億という人々が熱風に焼かれた。

そんな世界で唯一核の恐怖を知っていた日本はいつかこんな日が来るだろうと独自にシエルターを建設し、そこに逃げ込んだ。

シエルターの中で人は戦争の恐怖を忘れるほどの時間を過ごした。

いつかこの場所から出られる日が来るだろうと信じて…

そしてついにその日がやって来たシエルターわもう限界だった至るところが朽ちていた。

そのため人々はシエルターから出た。

まだ見ぬ希望を信じて。

だが人々を待つていたのは絶望だった。

緑が繁り原生林のような森が広がっていると信じられていた外の世界は

その真逆とも言える世界だった

大地は渴れはて水は一滴もなく、緑と言える緑は何処にもなかった。

人々はシエルターの中にいつから植えられていた木々を渴れはてた大地に植えた。

しかし、瞬く間に枯れてしまった。

土はおろか大地、地球そのものが死んでいた。

人々は初めて見る太陽の光に目を痛くしながらこれからのことを考えていた。

太陽が沈みかけるとき東の空には満月が輝いていた。

しかし明日からの生活に希望を持ってない人々はその満月に気付くはずもなく満身創痍でうつむいていた。

そんなときだった。

空に浮かんでいた満月が突然真っ二つに裂けた。

そして裂けたところから黄色の液体が流れ出た。

それは地球に引き寄せられるかのように全て地球に降り注いだ。

人々は再びシエルターにもどりこの不思議な雨があがるのを待った。

しかしこの雨はやむことなく三日間降り続いた。そして四日後のあさ

雨のやんだ太陽の下人々は信じられないような顔をして立っていた。彼らの前には青々とした葉をつけた植物が生えていた。

何処か遠くでは鳥が鳴いていた。

人々は希望を手にしたのだ。

人々はその時降った雨をムーンドリップ、月の雫と呼んだ。

しかしその雨の後人々の生活には大きな変化があった。

一つは人々が不思議な力を使えるようになったこと。

いわゆる魔法である。

もともと月には霊力的ものがあり、昔から占いで使われるなど、その力は確かなものだった。

二つ目は敵となる種族が誕生したことである。

人々は彼らを【バルバロイ】と呼びんだ。

彼らは魔法を使いこなし、言葉とは思えない言葉でコミュニケーションをとっていた。

彼らは人を敵と見なし襲いかかって来るような獰猛な性格だった。

人々は身を守るのが精一杯であった。

昔人間は自己防衛のために銃をもち相手を殺したとあるが、今となつては銃は朽ち新たにつくりだすような技術は失われてしまった。

今人々を守るのは、

バルバロイの使う武器をまね作られた剣と

魔法くらいである。

剣を扱う技術は失われていなかった。

競技として剣術があったからだ。

多くの人が自分を守るため、家族、親しい人を守るため剣術を習得していった。

物語はムーンドリップから10年後町ができそこに建てられた剣術道場に通う一人の少年から始まる

第1話、町にて…

ドコツ!!

その音はかなりの衝撃を感じさせた。

ここは町の剣術道場。

日々人々が稽古にあけてくれている。

そのなかにかなり気合いの入ったひとが一人いる。

歳は15そこそこの茶っこい髪をはやした男の子がいた

彼の名前は神藤しんどうはじめ一

なかなかの腕を持っていた

それもそのはず一の住む町では、15歳になると防衛軍として参加しなくてはならなかった。

これは男子の場合で

女子は魔法を扱う力つまり魔力のあるものが選抜され特別教育を受けると言った様子である。

男子に魔力はないのか、あることはあるが

女子と比べると圧倒的に少ない。

そのため男子で魔法の使えるものはかなり特別視されている。

一は魔法を使うことは出来なかった。

そのため毎日稽古に明け暮れているというわけである。

一の相手は同じ年の宮内悟みやうちわたるである。

悟はかなりの剣才の持ち主で

それだけでなく頭もキレル奴で女の子からの人気も高かった。

二人は親友と呼べるほどの仲だった。

今日も稽古が終わりいつものように二人で行きつけのラーメン屋に行った。

「らっしやい!!」

威勢のいい声とともにいいにおいが鼻をつく。

二人が席に座ると町一番の美少女と言われている佐々木みゆきがオーダーをとり二人のもとにやってきた。

「よっ!!」

きさくな感じに話しかける

「いらっしやい。今日も二人？」

「悪かったな!いつもふたりで!!」

「悪くはないけど…それよりなに食べんの?まさか私に会いにきてくれたとか」

「はドキツとした様子で言う」

「ば、ばかやろうそんなじゃねえよ!!」

だが一の顔は真っ赤だ

「そんなムキになんなくたっていいじゃないそれより注文は?イツモノでいいの?」

「俺はいいけど、悟は?」

「俺もイツモノでいい」

二人はイツモノが通るほどの常連客である。ちなみに一のイツモノはチャーハンセットAで悟のは塩ラーメンバターコーントッピングである。

二人のオーダーを受ける前からマスターはつくり始めていたらしくすぐに出てきた。

二人は出てきた料理をたべながら悟が話だした。

「防衛軍になつたらしばらく帰ってこられないんだろ?」

防衛軍は初め団結力を深めるため五泊六日のキャンプから始まる。

さらにそれからは町にある寄宿舎で寝泊まりすることになる。

「らしいな。それより小隊は三人一組だろ、俺とお前とあとひとりだな…だれだろうな。」

「そもそもお前とも一緒になれると限らないだろ…」

「いやあこの町に俺とタメなのは10人前後だろ、そのなかで仲が いいのはお前だけだからお前と一緒にじゃなかったら終わる…」

「せつねえなあ」

「そお言うなって、お前だって俺以外の人と居るとこ見たことねえぞ…」

痛いところかれたと思った。

「まあいいかお前が居ると心強い」

「よっし決まりだ！なら最後の一人だな…バランスを考えると女の子だな」

「かわいい子がいいなあ」

「は一人妄想にふけていた」

「まあ期待はあんまりしない方がいいな。外れたときのショックがおおきい。」

そんなバカな話をしながら二人はおいしく料理をたべていた。

店からでると二人家路についた。

「はそろそろ準備を始めるかと思っていた」

必要な物のリストをみたがほとんどの物には準備が出来ている二重線がひいてあった。

大丈夫だろ…まだ一週間ある。と思いつながら家に向かってあるいた。

第2話、キャンプ初日

一週間が過ぎ、今日から防衛軍として参加する一は悟の家の前に来ていた。すでに一がついからかなりの時間がたっていた

「つたく。アイツはなしてんだよ…」

その時悟が大きなりユツクサツクを背負った悟が勢いよく扉を開け、出てきた。

「なにやってんだよ!!!」

「わりい、寝坊しちった。」

「つたく、お前はへんなとこぬけてんな」

「そお怒んなって、行こうぜ。」

「ああ、集合は公園だったよな。」

二人が公園につくとまだ本来の集合時間でないので多くの人が来ていた。

「みんな早いねえ〜」

「お前が遅れなきゃもつと早くついたんだよ」

「そこ!!! 私語はつつしめ!!!」

その言葉で一気に空気が変わった。

「今日からお前たちは防衛軍として兵役につく訳だが誰もお前たちに戦果など期待していない。おつと自己紹介がまだだったな私は木村光一だ。」

まわりがざわついた。

「なあアイツなにもんなの?」

「バカ知らねえの!? 八光騎士団の団長さんだぜ!!!」

八光騎士団とは誰しもが憧れる最強騎士団である。

「静かに!!!」

木村とは違う髭をはやしたオヤジが言った。ざわついていた人も口を閉じた。

「ありがとう林くん」どうやら林と言っらしく歳は明らかに林の方

が上だ。

「続けるぞ諸君は今日からキャンプに行くわけだがそこで軍の基本をみっちり勉強してもらおう。まあ勉強と言っても机に向かうだけが勉強じゃない。そこで軍の基本となる小隊を作るわけだがこの小隊は本隊と合流した後も続くらかな。まずは二人のペアを作れ、そこに一人コチラで用意した女子を入れる。ペアができたら俺の所に来い。」

一と悟は話の途中にすでにアイコンタクトをとっていた。他のやつらはペアを作るのに苦労していたが一と悟はすでに決まっていたがあえて隊長のもとえは行かなかった。悟いわくこれは初めのほうに行くと言っていた。エリート思考の強い奴が多いからだそうだった。なるほどと思い、悟の意見に賛成した。

結局最後まで決まらないふりをして最後のペアとなった。

「お前たちで最後か、お前たちには…あみ、お前だがんばれよ。」
「は、はいっ。がんばります。」

一の第一印象はなかなかよかった顔はかわいい系でせは50後半、スタイルもなかなかのものを持っていた
だが悟に言わせれば30点、行っても40前半らしい

「静かにしろ!!!」
また一斉にくちが閉じた

「自己紹介は後にして出発するからな。全員荷物をもて!!!」
あわただしくなり各自自分の荷物を持ち組のできた順に並ぶ。
当然さいごの一の組はあまり隊長からのマークもなく移動中もしゃべりっぱなしだった。

「えっと…高橋あみっていいいます。よろしくです。えっと…血液型はO型すきなものはクリームパン好きな動物は犬です。一応スリーサイズは上から……」

聞いていないことまでペラペラと出てくる。この感じからすると仲良くやっていけそうだと二人は思った。

他の組はとゆうと…はやくも男女間でトラブルになりそうな所もあった。

あみは、養成学校でぎりぎりの成績だったらしくかなりのどじっ子であることもちの悟の捜索で明らかになった。

「高橋さんは、どんな魔法使えんの？」

「あみでいいですよ。えっと…そうですね…基本何でも出来ますよ。でも得意なのは回復系統ですね。家が医者だったもので。」

魔法で治ると言っても所詮応急処置にしかならない。つまり切り傷程度なら治るが骨折など重症になると魔法ではてにおえないらしい。上位者になると深い傷や呪文による攻撃で作られた傷を跡も残さずに治してしまう。

「魔法って言ってもいろいろなのが有るんだな。」

「基本属性は火、水、地、氷、雷、風、光、闇ですね。回復魔法は光に分類されますから私の専門は光ですね。」

専門とは、人はそれぞれ生まれたときから決まった属性を持ち生まれてくる。その生まれ持った属性が専門である。あみはその専門を見分けられるそうで、一は火、悟は雷だとゆう。

「ってことは、俺や悟にも魔法が使えるようになるってことか!？」

「練習すれば誰でも出来ますよ。そんな難しいことじゃないし」

そおこおしてる間にベースキャンプの予定地に着いた。

すると木村隊長が

「よし小隊ごと二人はテントをはれ!!残りは俺についてこい水を汲みにいくぞ。」

「水かじゃあ俺かお前だな…」

と言った悟は一をじつとみている。

「私は？」

あみが横から出てきた。

「さすがに女の子にはまかせられないでしょ」

「があっさりと流す。結局ジャンケンで悟が行くことになった。

「じゃ建てちゃいますか。」

「そうしますか。」

二人はテントを建て始めた

「水が来たら各隊で料理作っちゃっていいぞ!!」

その時ちようど悟がテントについた。

「重かった…」

「ごくろろうさまです。」

「おつかれ。」

それから三人とゆうかあみ一人でカレーを作った。

あみはかなりの腕前の持ち主で手際よくカレーを作っていた。

結局あみ一人で作ったカレーを食べながら、これからのことについての説明があった。

「まず私達は町からかなり離れた所に来ていることを忘れないで欲しい。どこにバルバロイが潜んでいるかわからない。もし戦闘になった時は焦らず身を守ることと専念すること。以上だ。」

ぞろぞろと自分たちのテントに戻ってゆく。

よほど疲れたのか三人はテントに着いたらすぐに寝てしまった…

その頃、隊長のテントでは…

「大丈夫か見張りも立てないで。」

「心配いらないよ林くん。君も寝たまえ。見張りなら私がする。」

「そうですか…では休ませてもらいます。後でまた来ます。」

「ああ。」

こおしてキャンプ初日は終了した。

キャンプ二日目、決意の朝

まだ東の空に太陽が見えるころ二人組の男子が川で水浴びをしていた。

なにくわぬ顔でテントに戻ろうとした時、悟は不意に背中の中の凍るような殺気を感じた。

「どうした悟？」

「隊長が呼んでるぞ。どうやら俺たち二人だけらしいな。」

「呼んでるって…」

名前を呼ばれた覚えはない。

「とにかく、行こうぜ。」

「ちよつとまてよ。」だが言い終わるまえに悟は歩きだす。

一がテントを出た瞬間悟が言っていたことが理解できた。

鳥肌が立った。

別に寒い訳ではない。テントの外側は世界が違った。足が地面に着いていない感覚だった。

「早くしろよ。向こうも待ってるらしいから。」

「あ、ああ。」

どうやら殺気の出どころは隊長のテントの前に立ってる人らしい。近づくともンヤリとだが輪郭とゆうか立派な髭が見えてきた。

木村隊長の補佐的立場の林だった。

「こんな時間に武器も持たずにどこえ行っていた。」

「顔を洗いに昨日の水場まで…」

「バカモンが！！敵に会わなかったから良いものの会っていたら二人とも死んでいたぞ！！」

「すみませんでした。」

「一番かわいそうなのは彼女じゃ」

林は一たちのテントを見ながら言った。

「あえて伏せていたが、あみの母はさゆりなんじゃ…」

一はピンと来なかったが悟は理解できたようだ。
あみの母、高橋さゆりは八光騎士団の一人で回復魔法に長けていた。
長けていたと言うより回復魔法を極めていた。彼女の前で死と言う
言葉はなかった。

死者おも生き返す姿から彼女は回復の鬼とまで言われた。
だが死者蘇生の魔法は文字通り命を削るものだった。

そしてあみを産んでわずか五年で死んでしまったらしい…

「それから彼女は養子として引き取られたらしいがな…」
言葉が出なかった。

二人は無言のまま林の前を後にした。

テントに入ると、あみは幸せそうに寝ていた。

そして二人は誓ったどんなことがあっても一人にはしない、お前を
置いて逝くことはない…

東の空に太陽が見えてきた。

そろそろコイツを起こさない…

キャンプ二日目

テントのなかに焼けたパンの香ばしい匂いが漂ってきた。

「いいにおい…」

テントでまだ一人寝ているあみはまだ寝ていたいとお腹が空いたの選択を迫られていた。

テントの布の間から光が差し込む

その布の間から男の子が覗きこんで言った。

「お〜い朝ごはんできたぞ。先食べちゃうぞ。」

彼女は大きなアクビをして起きることにした。

布団を出ると肌寒かった。枕元にあったマントを手に取り外にでた。

「早くしろよ!！」

二人もお腹を空かせているのだろう。

「ごめんごめん」

これで空いている椅子もなくなった。

「いただきます!！」

皆一斉に出された料理を食べ始める。

三人が食べ終わるころ隊長が今後の予定について話してくれた。

「え〜今後の予定だが、とりあえずはここを拠点として、様々な事を勉強してもらおう。内容はお前達が軍に任させる任務についてだ。

軍には様々な依頼がくる。商人の護衛、薬草の採取、地図の作成等だ。場合によっては戦闘になることもある。どんな任務を任せられたとしても必ず成功できるようにまずは基本的内容をお前たちに叩き込む。」

「薬草とか俺パス」

「お、俺も」

渡された本を前に開く気配さえない二人…

「あみ、まかした」

一が言う。

「私になにかあったときはあなたたちでやらなくちゃならないんだから」

「うっ…」

「わかつたらまず本をひらく!!」

言われるがままに本をあけた。

わからない言葉だらけだったがあみがひとつひとつ教えてくれたので理解できた。

その後は剣術の訓練があった。

一と悟わ他の隊の人と稽古していた。

人数が多いほうが効率がいいからだ。

新しい攻め方もみにつく。

一は隙をついて相手に切り込んだ。

相手は反応できなかった。相手の頭すれすれで剣をとめる。

本当の戦いになったらこの剣は相手の頭をかち割らなければならぬい。

「勝負ありだな」

「まいりました」

同じように悟も稽古をしていた

が相手はかなり強いらしくてこずっていた。悟の相手は珍しく二刀流で名は涼とゆうらしい。

かなりの鍛練を重ねていることがわかる。

結局二人は引き分けとゆう形でおさまったがこのまま戦っていたら確実に負けていたと悟は話す。

夕食時になり三人は調理を始めた。
今日のメイン食材は魚である。それもかなりの大きさである。剣の稽古の間姿を見せなかつたあみが一人で釣りあげたものらしい。調理のしかたをめぐってああだこおだ言ってる間に一が勝手に丸焼きにしてしまった。

文句をいいながらふたりは食べていたが、完食してしまった。
隊長から集合がかかった

張り積めた空気が隊長の周りをかこんでいた。

「今朝がたここから二キロほど北に行つたところで戦闘がおきた。」
戦闘の言葉に辺りがざわついた。

「敵の撃破には成功したが残党勢力が付近にいる可能性がある。」

「よってこれより未明まで見張りをたてることにする。見張りの仕事は辺りの哨戒ぐらいだろうがな……」

「見張りは各小隊ごとおこなう。以上解散!!」

「ってことは……おれたち最後じゃん」

「みたいですね」

テントにつくと三人はすぐ寝た。見張りの順番は最後……

つまり明け方になる。それまでにたっぷり寝る予定らしい。

キャンプ三日目、談話

まだ太陽が沈んでいるころ

空には満天の星空が広がっていた。

誰もが睡眠をとっているころ、急に物音がした。それは足音で複数のものであった。

悟がその音に気付いた。自然と枕もとにある剣に手が伸びる。

さわるかさわらないかのところで

「おい！！交代の時間だ。」

その声で残る二人も目を覚ました。

「わかった、いまいく」

悟が返事をする。

そして剣とマントを取り一人テントの外にでた。剣を腰に差し、マントを羽織った。あとの二人も眠そうに目を擦りながらでてきた。

「いくぞ」

と松明を持った悟が急かすように言う。

隊長のテントのみ明かりがついていたので行き先は楽にわかった。

明かりの近くで隊長と合流できた。

「とりあえず体を温めなさい。未明はかなり冷える。」

三人は明かりの周りをかこむように座ったがどう考えても小さい炎が彼らの前にはあった。

「少し離れて」

後ろから薪を何本ももった人が現れたがこえからして隊長ではなかった。髭もないので林でもない。

男は小さな炎に薪をくべると、指を鳴らした。すると急に火力があがった。

火の魔法である。その炎で見知らぬ男の顔も照らされた。年はまだ20前後だろう。髪は銀色をしていた。

「はじめましてだよね。明智っていいいます。話は聞いてるよ隊長か

ら。」

その時金属製のやかんとマグカップをいくつも持った隊長がすがたをみせた。

「コーヒーでいいかな？」

「ぼくはミルクティーがいいな」

「甘党だからな明智くんは」

やかんを火にかける。

「お腹も減っちゃいました。」

と言って明智は立ち上がってテントの方に歩きだす。

「いつからいた？あの人？」

「さあ、見かけなかったよ」

三人は小言で話す。

テントから皿にサンドイッチをたくさんのおせ明智が出てきた。

「よいしょつと」

どかつと腰を下ろす。その勢いで皿からサンドイッチが落ちそうになった。

「食べる？」

と言って一達の前に皿を差し出した。

腹ペコの一はかぶりついた。

残る二人もいただくことにした。

お湯もわいたらしくやかんの口から白い湯気が上がっていた。

やかんの中のお湯は一つを除いてコーヒーを溶かした

のこる一つもティーバッグに入れられた紅茶の色に染められていく。

明智はその紅茶にミルクを注ぐと角砂糖を何個もいれていった。

十個くらいいいれたあと味をたしかめるように一口のむと顔をしかめた。さすがに甘すぎたんだろとはじめはおもった。が明智は角砂糖のビンを取るとさらに二つカップのなかにいれた。まだたりなかつたらしい。

東の空が仄かに赤みがかった……

重大発表

結局その後はよが明けるとゆうわけで見回りには行かなかった。が太陽が昇るころにはどのテントでも寝ている人はいなかった。誰しも不安で眠れなかったようで眠そうな顔をしていた。

その頃に戻っていいと言われた一達はテントに戻り朝食の準備にとりかかっていた。

といってもあまり腹の空いていない三人は、ゆでたソーセージをパンにはさんだホットドックをむりやりに近いかたちで胃に流し込んだ。

間も無く集合がかかった。

全員が集まったところ隊長が話し出した。

「林くん、明智くんと相談した結果、今日でキャンプを終了する。理由は皆知るように残党の存在だ。これ以上危険をおかす必要もない。」

重大発表にあたりが騒然となる

「各自荷物の整理をしる出発は二時間後だ。」
それぞれテントにもどる。

テントをしまったりするのにかかってしまい二時間などあつと言つ間に過ぎた。

三人は重くなったりリュックを背負い、集合場所へと急いだ。
集合場所にはすでに多くの人が集まっていた。

「これで全員だな行くぞ！」
一斉に歩きだした。

行くときは背中に背負っていた剣は腰にさされいつ敵が現れても大丈夫なように隊列も組まれていた。

残党狩の部隊と途中すれ違った。

鎧を装備した彼らは明らかに他と異彩を放っていた。
町が見えてきた。

町への入り口の門の前には多くの兵がいて自分の職務をまっとうすべく辺りをみている。そしてこれから生活していくことになる寮についた。寮は小隊ごとになっていて一達は十寮となる。ちなみに寮長は明智である。

案内が一通り終わったあと、仕事の説明があつた。話によると始めは簡単とゆうか雑用がメインだが有事の際は防衛軍として活動すると、前にも聞いたような話を聞かされた。

疲れ、眠くなつた三人はその後部屋で寝てしまった…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3223f/>

ムーンリップ～月の雫～

2010年12月2日15時33分発行